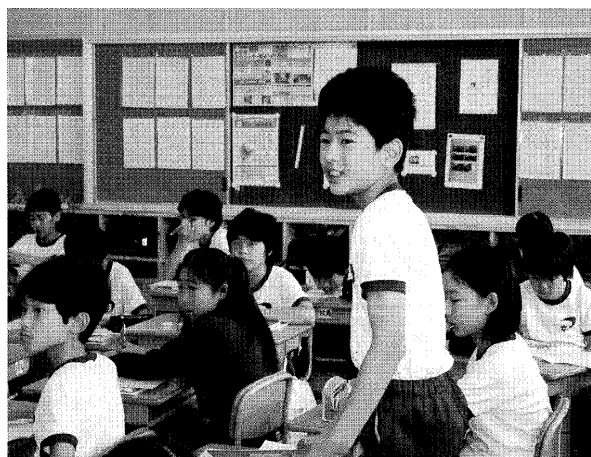


社会科の研究

今井 渉



🔑 キーワード

社会的事象の関係的とらえ・動的とらえ 文脈の更新・認識の再構成

🌀 主張

社会科でねらう中核となる学力は、「社会的事象を関係的にとらえる力」である。具体的には、「社会を成り立たせている人々の結びつきを事実としてとらえ、結びつきの背景にある思いや願いを見出す」力である。

この中核となる学力を「未来の社会の担い手」としての育ちに結びつけていくためにねらうのが、「社会的事象を動的にとらえる力」である。具体的には、「社会を人間の知恵と努力、創意と工夫によって変化し続けるものとしてとらえる」力である。

「関係的に思考しながら、自分とのかかわりから現状を認識する」→「多面的に思考しながら、人々の取組の意味を確かにとらえる」→「社会参加への意欲を高め、自分の社会参加への在り方について意志決定する」という過程の中で、社会的事象をとらえている自分なりの文脈を更新し、社会認識を再構成することで、「未来の社会の担い手としての認識を創りあげる子ども」の具現を目指した。

I 未来の社会の担い手としての認識を創りあげる社会科

1. 社会科で求める子ども

求める子ども

未来の社会の担い手としての認識を創りあげる子ども

「意欲・態度」

社会的事象を動的にとらえる力

「中核となる学力」

社会的事象を関係的にとらえる力

社会は様々な人々の結びつきによって成り立ち、よりよい生活を具現するために変化し続ける、そして、その中心には「人間」がいる。そのような認識に立ったとき、子どもは、自分もその一員であると自覚し、「未来の社会の担い手」としての一步を力強く踏み出すことになる。

これからの社会科において大切なのは、現状を事実として認識したり、関係的にとらえたりするだけではなく、社会の変化を動的にとらえていくことである。

「関係的に思考しながら、自分とのかかわりから現状を認識する」→「多面的に思考しながら、人々の取組の意味を確かにとらえる」→「社会参加への意欲を高め、自分の社会参加への在り方について意志決定する」という過程の中で、社会的事象をとらえている自分なりの文脈を更新し、社会認識を再構成することで、「未来の社会の担い手としての認識を創りあげる子ども」の具現を目指していく。

2. カリキュラム改善の視点

求める子どもの具現に向けて、小学校3年生から6年生までの段階性、学年内の単元の連続性を考え、下記のようにカリキュラムを編成する。

| | 段 階 | 学年内の単元配列 |
|--------|---|--|
| 小学校3年生 | 地域の特色（よさ）から、社会的事象の意味を把握する学年。 | 「現在もっているよさ」から「生み出されつつあるよさ」に重点を移していく単元配列。 |
| 小学校4年生 | 地域の組織的・計画的な結びつきから、暮らしを支えている人々の取組の意味を把握する学年。 | 地域の中における人々の結びつきを、暮らしに身近な順で配列。 |
| 小学校5年生 | 様々な産業の変化や発展から、産業に従事している人々の取組が国民生活に与える影響を把握する学年。 | 産業に従事している人々の工夫や努力を歴史的な経緯からとらえ、取組の意味を国民生活の向上、環境の保持等、空間的なつながりからとらえることに重点を置く。 |
| 小学校6年生 | 政治、外国との関わり、文化、から、国や地方自治体、自分の在り方を考える学年。 | 政治史、外国との関わりの歴史、文化史、の3つのテーマ史から構成。 |

3. 授業改善の方策

<学習過程>

関係的に思考しながら、自分とのかかわりから現状を認識する過程

社会的事象と自分のくらしとのかかわりを追求しようとする意欲を高める。(問いの発生)



社会的事象に内在する事実を関係的にとらえようとする。
(問いの焦点化)



社会的事象と自分のくらしとの関係を見出す。(問いの解決)



社会生活の向上に向けた取組への着目。(新たな問いの発生)

<教師の働きかけ>

- 社会的事象と自分のくらしとのかかわりに目を向ける資料の提示
- 社会的事象に内在する事実を調べる場の設定
- 社会的事象に内在する事実の関係付けを図り、自分にとっての意味を考える活動の組織
- 社会生活の向上への取組に関する資料の提示

多面的に思考しながら、人々の取組の意味を確かにとらえる過程

取組の背景にある思いを追求しようとする意欲を高める。(問いの発生)



取組の背景にある論理をとらえようとする。
(問いの焦点化)



人物の論理と社会生活の変化との結びつきを見出す。
(問いの解決)



よりよい社会生活を具現する自分の在り方への着目。
(新たな問いの発生)

視点の転換による
文脈の更新

- 取組の困難さに目を向ける活動の組織
- 人物の取組の背景を明らかにする活動の組織
- 人物の取組の社会への影響を調べる場の設定
- 人物の取組から学んだことをまとめる場の設定

社会参加への意欲を高め、自分の社会参加への在り方について意志決定する過程

社会の未来やその中で生きる自分の在り方について考えていこうとする意欲を高める。(問いの発生)



人物の論理と自分の在り方との結びつきをとらえようとする。(問いの焦点化)



社会生活における自分の在り方をまとめ、交流する。(問いの解決)

とらえ直した文脈による社会認識の再構成

- 社会生活へのかかわり方について、学んだことを生かして表現する場の設定
- 仲間との相互評価を通して、社会に対する認識の広がりや深まりを自己評価する場の設定

4. 評価方法

<キーワード法による評価>

- 人々の取組を調べ、その特徴をキーワードとしてまとめる場を設定し、期待した姿と照らし合わせて評価する。

<キーワード作文法による評価>

- これからの社会やその中で生きる自分の在り方について、キーワードを使って自分の考えを作文でまとめる場を設定し、期待した姿と照らし合わせて評価する。

II 実践の概要

第6学年

「統一への動きと戦国の世に生きた武士」

1. 自分なりの文脈をもちながら、戦国の世のとらえを深めていく学び

6年生の社会科では、「社会がどのようにつくられてきたのかを知り、これからの社会生活に生かす」を年間のテーマとして設定した。現代人としての感覚を大切に、自分なりの文脈で当時の人々の様子を思い描くことができるようにすることで、歴史的事象を遠い過去の出来事ではなく、自分たちの生活とつながりのあることとしてとらえることを願っているのである。

本単元では、戦国の世の統一への動きについて、「山城」を中心的な事象として取り上げる。身近な地域における歴史的事象を学習対象とすることにより、現代の様子とつなげながら、自分なりの文脈で当時の武士の思いに迫っていくことができるようにするためである。

具体的には、戦国時代の武士たちの考えについて、「なぜ山の上に城を築いたのか」、「なぜ山の上にあった城を長岡の中央に移したのか」を追求問題として、世の中の動きと関係付けながら考えていく。そのことにより、「戦いに勝つことを求めた時代」から「安定した世の中をつくろうとした時代」へと移り変わっていったことについて、自分なりの文脈を更新し、当時の世の中に対する認識を再構成することで、戦国の世の中に対するとらえを深めていく姿を期待した。

本単元における「社会的事象を関係的にとらえる」とは、「信長・秀吉・家康と長岡の領主の共通の思いをとらえる」ことである。また「社会的事象を動的にとらえる」とは、「戦国時代の長岡の城が移り変わっていった理由をとらえる」ことである。社会を関係的・動的にとらえることを関連させながら単元を構成することで、「思考力」を軸に「学ぶ意欲」と「知識・技能」の高まりをねらった。

2. 単元の構想

(1) 単元の目標

戦国時代の統一への動きについて、信長・秀吉・家康の行ったことと長岡の城の移り変わりを調べ、当時の武士の思いを明らかにしていく中で、戦国の世の中は、戦いに勝つことを求めた時代から安定した世の中を求める時代へと移り変わっていったことを理解し、力ばかりではなく政策で治める世の中へ変化したことに気づく。

(2) 追求の構想 (8時間)

1次 戦国の世に生きた武士 (2時間)

◎信長、秀吉、家康は
どんなことを行った
のだろうか。

2次 戦国の世の長岡 (3時間)

◎なぜ山の上に城を築
いたのか。
◎なぜ山の上にあった
城を長岡の中心に移
したのか。

3次 統一への動き (2時間)

◎戦国時代の武士たち
の考えはどのように
変わっていったのか。

3. 授業の実際

(1) 戦国の世の武士たちはどんなことを考えていたのだろう

「全国統一への動きと当時の長岡」をテーマに学習をスタートした。最初に織田信長、豊臣秀吉、徳川家康について、教科書や資料集を使いながら調べていった。

| 織田信長 | 豊臣秀吉 | 徳川家康 |
|---|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ・武田氏を長篠の戦いで破る。 ・将軍の足利氏を追放した。 ・安土城を築く。 ・キリスト教の保護。 ・商人の営業の自由。 <p>など</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・明智光秀を倒す。 ・大阪城を築く。 ・田畑の面積を測る(検地)。 ・農民から刀等の武器を取りあげる(刀狩り)。 <p>など</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・秀吉の死後、関ヶ原の戦いで対立する大名を破る。 ・征夷大將軍となって江戸に幕府をひらく。 ・豊臣氏を滅ぼす。 <p>など</p> |

調べ活動の後、調べてみて思ったことを発表しあう活動に入った。

その中で真紀子さんは次のように発言した。

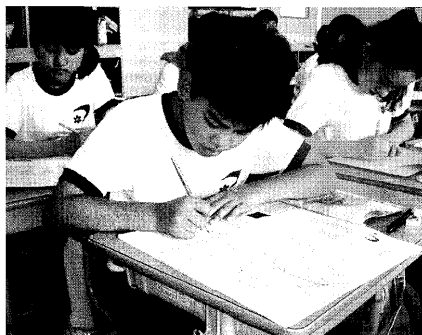


織田信長は長篠の戦い、豊臣秀吉は明智光秀との戦い、徳川家康は関ヶ原の戦いなど、信長も秀吉も家康も戦ってばかりいる。戦いに勝つことばかりを考えていた時代だと思った。

頷いたり、頭を横に傾けたりしている子どもたち。織田信長、豊臣秀吉、徳川家康の行ったことはわかったが、その意味付けがはっきりとしないのである。

そこで、「当時の武士たちはどんなことを考えていたのかな。当時の長岡の様子を調べながら考えていこう。」と投げかけ、「中世の長岡の山城と館跡の分布図」を提示した。

悠太さんは図を見ながら次のようにノートを書いた。



信濃川の下流の方には城がほとんどない。城は山があるところに多く、山がないところには少ない。

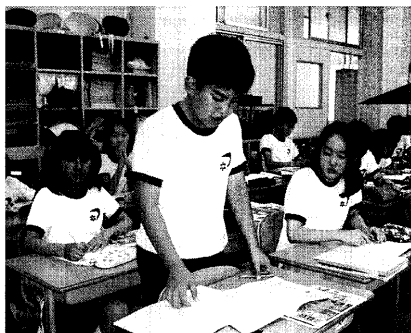
山があるところに城が多いのは、多分かくれるため、目立たなくするためだと思う。

悠太さんは、自分なりの文脈で歴史的事象を解釈していくことができる。上記のノート記述は「戦いに勝つ」という文脈で、「山に城があったわけ」を解釈している。本単元では、「戦いに勝つ」という文脈を「安定した世の中を求める」という文脈に更新し、戦国の世の統一への動きについての認識を再構成して、戦国の世に対するとらえを深めていく姿を願った。

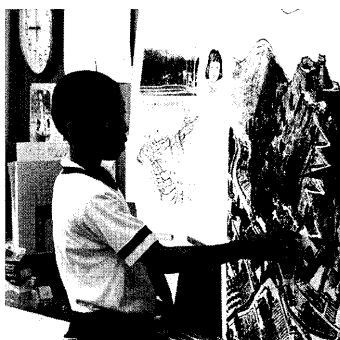
(2) なぜ山の上に城を築いたのか

悠太さんをはじめ学級の大勢が「山の方に城が多いこと」に着目してきた。

そこで、追求問題を「戦国時代の武士は、なぜ山の上に城を築いたのか」として学級全体で話し合うことにした。悠太さんはさっと手を挙げ、真っ先に発言した。



戦国時代の武士が、なぜ山の上に城を築いたのかというと、敵を攻撃しやすいからだと思います。上から攻撃する方が有利だし、下から来る敵は攻撃しにくいと思います。

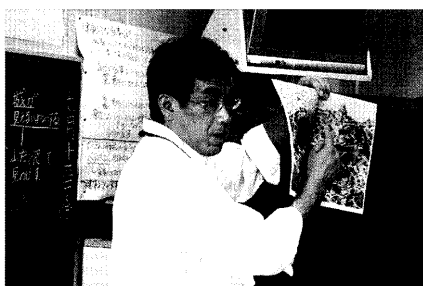


下で戦って、それでもだめだったら上で戦うことができるからだと思います。

山の上に城があると、敵が道を登ってくるときに攻撃の準備ができるからだと思います。



他にも「身分の高い人を逃がしやすい。」「道が1つなので真っ向から勝負ができる。」等の発言が続いた。「戦いに勝つ」という文脈から山に城があった理由を解釈している姿である。



城が山にあった意味は、みんなが言うように戦いに勝つためだったと思います。山に空堀等をつくって、なるべく攻められないようにしていたそうです。教科書にある信長の安土城も山の上に城がありますね。当時の城は戦いのための城と言えそうですね。

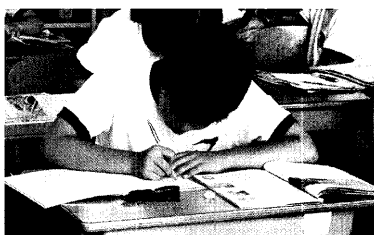
何度も頷く悠太さん。他の子どもたちにも同じような姿が見られた。

「やっぱり当時の武士は戦いに勝つことを第一に考えていたんだな」と考え、安定している子どもたちに、次のように投げかけた。

「でも、みんなの知っている城って長岡城でしょ。長岡城ってどこにあったの？」

「長岡駅前って聞いたことがある。」「あれっ、どうして。」等のつぶやきが聞こえる。

「なぜ、山の上にあった城を長岡の中央に移したんだろうね。」と問いかけた。悠太さんは、しばらく考えた後、次のようにノートに書いた。




多分、平らな土地の方が広くなり、城までの長さで、山と同じように時間がかかる。山は高さで、今度は広さで時間がかかる。

「戦いに勝つ」という文脈で城の移転についても解釈している悠太さんである。

(3) なぜ山にあった城を長岡の中央に移したのか

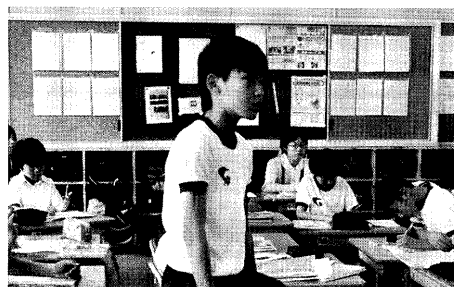
「なぜ山にあった城を長岡の中央に移したのか」について考えあうために、当時の長岡城の絵を提示した。



広いから、攻めにくそうだな。このくらい広いと戦いやすかったんじゃないかな。

門がたくさんあるし、堀もたくさんあるぞ。
城に攻めてこようとする敵をそこでくい止めたのではないかな。

全体での話し合い活動に入った。「門があるから時間かせぎができる」「広さがあって攻めにくい」等の発言が続いた後、郁雄さんが発言した。



長岡の真ん中だと指示を出したり政治をしたりするのがしやすいからだと思います。戦いが少なくなって暮らしやすい方にしたのではないかと思います。

「戦いに勝つ」という文脈の更新に向かう発言と考え、「郁雄さんの発言、みなさんはどう思いますか。」と問いかけた。正面を見据えてじっと考えている悠太さん。さらに発言が続いた。

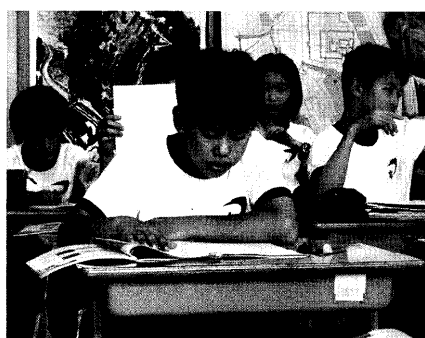


徳川が天下を統一して、幕府に抵抗するものがいなくなったから、平和になって移したと思います。

山の上にいるよりも平地にいた方が必要なものが手に入りやすいのではないかと思います。



郁雄さんの発言を契機として、「戦いに勝つ」という文脈から、「政治のしやすさ、暮らしやすさ」という文脈に更新することで、「城の移転の本当の意味」に迫り始めている子どもたちである。



悠太さんも仲間の発言をじっくりと聞いた後、ノートに次のようにまとめた。

城を中央に移し、大きくすることによって、大名の力を上げ、政治をしやすくしたと思う。

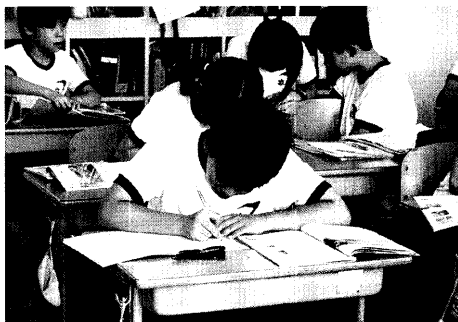
自分なりの解釈を生かしながらも、「政治のしやすさ」から移転の意味をとらえ直しつつある姿である。

(4) 全国統一を目指した戦国の世の武士たちの考えはどのように変わっていったのか

学習のまとめでは、もう一度織田信長、豊臣秀吉、徳川家康の行ったことを確かめ、「全国統一を目指した当時の武士たちは、戦いに勝つことだけを考えていたわけではなさそうですね。」と語りかけた。悠太さんはじめ多くの子どもたちが頷いた。

そこで、「学習の最後に、全国統一を目指した武士たちの考えはどのように変わっていったかについて、自分の考えをノートにまとめてみましょう。」と促した。

悠太さんは次のようにノートに考えを書いた。



全国統一を目指した武士たちの考えは、平和を求めていくようになったと思った。それは、自分が戦いとかで負けてしまい、位が下がるのはいやだと思い、必死に平和をしようとしているということだ。

その気持ちがあったから、この後の時代がずっと長く続いたのだと思う。

山にあった城を移すことが平和につながっていった。

自分なりの解釈を生かしながらも、仲間の発言にじっくりと耳を傾けることで、「統一を目指して戦いに勝つことを目指していた武士の考えは、統一を長く維持するために平和を求めようとする考えに変わった」と、統一へ向けた当時の世の中の動きについての認識を確かに創りあげた悠太さんである。

この姿は、本単元で求めた、「戦いに勝つ」という文脈を「安定した世の中を求める」に更新し、戦国の世の統一への動きについての認識を再構成して、解釈を深めていった姿である。

Ⅲ 成果と課題

思考力を軸に、学ぶ意欲の高まりと知識・技能の確実な習得を図り、生きて働く力としての新たな概念・認識・価値観の形成に向かうために大切なことが見えてきた。

- ① 意欲と思考力の高まりをねらうには、「問いが連続する」ことが大切である。本単元で述べると、「なぜ山の上に城を築いたのか」→「なぜ山の上にあった城を長岡の中央に移したのか」と問いが連続している姿である。本単元では、時間的な経緯による事実の動きを追いかけて、その意味をとらえ直す学習展開によって、問いが連続している。
- ② 意欲、思考力、知識・技能の関連的な高まりをねらうためには、社会的事象の意味を文脈でとらえ、追求を進めることによって文脈のとらえ直し生まれるようにすることが大切である。そうすることによって、自分なりの意味付けがされ、活用できる知識となる。その一連の過程には、学ぶ意欲、思考力が働いている。

上記のことより、本研究における求める学びは、「問いが連続することにより、文脈のとらえ直しが生まれる授業」であることが見えてきた。課題は、その中で「単元の入り方」がはっきりしていないことである。

「単元の入り」というのは、知識・技能の習得場面であるが、その場面をどのように展開すればいいのかがはっきりしない。本単元では、「信長、秀吉、家康の行ったことを調べてみよう。」で入っている。広い入り方であり、子どもの問題意識が高まっていない段階での調べ学習である。「狭く入って奥行きは広く」という言葉もある。単元の入りにおける子どもの学習意欲をどう高め、それをどのように問いの連続につなげていくかを今後の課題としたい。

<主な参考文献>

- 市川 伸一 2004 「学ぶ意欲とスキルを育てる」 小学館
 佐伯 胖 2004 「『わかり方』の探究 思索と行動の原点」 小学館
 西林 克彦 1997 「『わかる』しくみ わかったつもりからの脱出」 新曜社
 西林 克彦 2005 「わかったつもり 読解力につかない本当の原因」 光文社